資料１

前回の検証部会でいただいたご意見

（１）検証の視点

①めざす児童生徒像の合意形成

・一番大切なのは、目指す児童生徒像が合意形成である。中学校は小学校の特色ある教育活動をほとんど引き継いでいない。

・目指す児童像、生徒像のすり合わせ、合意形成について、どれだけ連携の中でそれについて話し合いが行われたのか、合意形成についてどういう取組があったのかという項目を別に設けるべきか。

⇒３つの柱のそれぞれに「めざす児童像、生徒像の合意形成」が入っていると考えられるため、別に設けることはしない。

・授業改善は、小学校は中学校を見据えて、中学校から見れば、小学校でやってきていることを生かしていこうという視点。結局児童・生徒像に繋がっていくのではないか。２の連携指導の人間の社会性の育成もやはり同じ。３は、接続に特化している。

・１の学力・体力向上、２の豊かな人間性・社会性の育成に向けて、それぞれの学校がどう連携して意見のすり合わせ、話し合いをして、共通理解できるようになったことはどんなことなのかを報告してもられば、それで十分ではないか。

②小中教員の相互理解

・滑らかな接続のためには、まず教員同士がお互いを知ることが大切である。

・文化の違いがあるからこそ、お互いが補えあったり、高めあったりするということが大事だと考えることが必要。時程、学年会、子どもに対する接し方、育て方も違っているのだから、お互いのいいところを引き合いに出しながら、足りないところを補い合っていくためにどういうふうに子どもを育てようかと考える必要がある。

・今グループ研究校でやっているのは、中一ギャップの解消を図りというところを最大のポイントにしている。３番が非常に大きい部分。その中で小学校と中学校の先生方の考え方や捉え方と、意識の違いはきわめて大きい。

・連携の中で、小学校と中学校の違いに気付き、それでどうやってお互いに折り合ってやっていくのかというところが小中連携の１つの最大の課題、それについてどういう取組がなされたのかという報告が出てくるようなものであれば、それ自身が評価となる。

・研究をやってみて、小中でこれだけ考え方が違うのかということは多少理解できてきた。どこからその違いが発生しているのかというところまで一部の人はわかってきている。その違いを埋めるというところまでは、とてもできないが、こんなにも違っているのだという気づきに着目してアンケートをとると幾つか出てくるのではないか。

③連携のための組織づくり

・校内研究を通して教員が一体となれるよう、主体的に積極的に関わらざるを得ないような組織を作ったり、分掌上、異学年交流することによって、共通の基盤を作る。そういう組織や雰囲気を作っていかないと、コーディネーターだけが一生懸命では続かない。いいことやっているのだから、頑張ろうという感じで進めていくには組織が大切。その組織の部分での評価ということを見ていかないと難しい。

・校内でどういう体制でこのことに取り組んだのかということをしっかり確認するというこ

とは大事、全校的なその取組としてで進めていくと。それが研究体制であったり、交流の仕掛けであったり、しっかり実績として報告していただくやり方はある。

（２）検証方法

①検証の重点と選択

・小中学校の立地条件によっては、連携指導や滑らかな接続への取組が難しい場合もある。交流活動が難しいため、授業改善による学力向上にスポットを当てて研究をしている。３本の柱の中で選択する形で検証するならばいいが、３つとも行うのは、非常に難しい。

・各年度ごとに小中連携の単位ごとに、今年のその課題を設定していただいて、それについてその年度の取組そのものの評価という形になれば無理がない。

・学校ごとに評価項目をつくって検証したところで、最終的に区としてまとめていくのが大変難しいのではないか。幾つかに絞って共通項目を各学校で評価してもらって、それを集約するみたいな形がよいのではないか。

②距離・規模などの環境要因

・中学校と小学校が 2.5 キロぐらい離れていて、子どもを１学年 140 人全部引率して中学校に連れて行くと、35 分から 40 分ぐらいかかる。部活動紹介や授業参観では、300 人近い小学生が中学校に押し寄せる。環境的な要因でこういった小中一貫教育ができにくい。

・検証を行う中で、活動しやすい学校規模や学校環境のあるところと、そうではないところがある。やりたくてもできないからできない、ということが生まれてくる。この検証は、やったことについての検証にしていくべきである。

③取組の評価

・取組を評価するということが大切である。

・１番、２番の評価軸の中に各学校がそれに向けてどういうその取組、話し合いをし、課題設定をしたのかといったそれそのものを評価の対象としていく。できるだけこの取組の成果がしっかり表に出るように評価するというスタンスでやっていきたい。

（３）検証に用いるデータ

①学力調査

・学習意欲や自己肯定感は、学力調査の意識調査の中に項目がある。それを経年で追っていくということは可能。

・課題解決カリキュラムは、中学を見据えて小学校を見て、ここを大事にしていきましょうという形でつくっている。単に、学力が上がったか下がったかという議論になると違う。

・学力調査と運動能力については、例えば小学校で課題になっているソフトボール投げなどが同じ校区の中学でもそうなのかと比較して見ることによって、小中の理解は深まる、学力に関してもうちで課題になっている考える力については、中学ではどうなのかなという、小中のその理解が深まる１つの材料にはなる。

⇒評価なのか、連携の取組の資料として使うのかというところで、扱いが違う。

・全国学力調査であれば、小学校５年と中学校３年、都の学力調査であれば、中２、小学校５年生の意識が中学校３年生になったときにどのように変わったのかというところが一番いい。年度が違えば対象が違うわけで、同じ学校であっても学年によっても全然違う。

②教員の意識

・課題カリキュラムを作ってやっているが、１年ぐらいで成果が出るようなものではない。ただ教員の意識というのは変わるかもしれないので、教員の意識をとることは意義があると思うが、それが子どもの学力に反映したかどうかは、そんな簡単なものではない。

③不登校数

・リーフレットにも不登校の減少を目指しているというような文言もある。小中連携、小中一貫でこういう努力というか、滑らかなその小から中への移行というか、そういったようなことになるように、頑張ってはいるのだけれどもというのは、やはり触れざるを得ない。
・小中連携の中で、不登校の数を減らさなければならないという取組というのは、ニーズは当然あるだろうし、学校としてもやらなければいけないが、実際に一貫教育として具体的に何を取り組むのかということは、ちょっとまだできていない。
・検証なので、学習意欲は高まったかとか、自己肯定感が高まったかとか、不登校は減ったかと、こういう項目が出てこなかったら、一貫教育の狙いから外れてしまう。単純に上がるものではないが、上がらなければ小中一貫教育はあまり意味がなかったとかいうことになる。ただ何年か見ていかないと、10 年近く見ていてもわからないかもしれない。
・不登校については、以前よりも小中学校の校長同士で連絡をとったり、養護教諭同士が連絡をとり合ったりとかしている。例えば、中学生の不登校児童に対して、小学校と連絡をとったり、小学校の様子を聞いたりしましたかとかいう項目だったら、丸がふえてくると思う。ただそれが解決まで至ったかというと、個々の事情がある。
・復活したということでないにしても、非常にケアができている、連絡が取れているということ自体というのは、見えないけれどもすごく大きなものである。アンケートの取り方も、そういうことがわかるような工夫が必要である。一貫教育そのものについての取組でなくても、一貫教育を行うことによって小中の教員が非常に仲良くなれて、付随することとして、ケアの連携が起きてきているという、そういう捉えができる。